

中国における学校評価制度の特質

— 重点学校制度から星級学校制度へ —

小川佳万

(2016年10月6日受理)

School Evaluation System in China

— From key school system to star grade school system —

Yoshikazu Ogawa

Abstract: This article aims to clarify the possibility and the essence of the problem that the evaluation system brings by analyzing the actual situations in detail such as the enforcement methods of the school evaluation system of Jiangsu Province, China. The following three points have become clear as the result of the analysis. First, the new school evaluation system can be described as the dynamo of the whole school reform that rolled up all senior high schools in the province, where there has been already fixed rating system before. In fact, there seem to be a lot of senior high schools which rose in rank. The government intends to activate the whole system under this kind of competitive environment. In addition, the government encourages high rank senior high schools to makes 'the education group', so that, inside the group, they can raise low rank schools in the new system. Second, evaluation indexes and the end-points are concrete, and the direction of the effort for improving becomes plain in the new system. Accordingly, it becomes clear which direction the government is going to lead the whole senior high schools to. In high school side, it also becomes clear in what points they should change if an evaluation result is not admirable. Third, there is substantial gain for senior high schools in this star rating system, which, for instance, the four star senior high schools have the rights to select good scored students in the entrance examination process. It may lead to raise the school rank due to the good college entrance examination results that many students enroll in prestigious universities.

Key words: School Evaluation, Key School, Star Grade, China, Jangsu Province

キーワード：学校評価, 重点学校, 星級, 中国, 江蘇省

はじめに

世界のどこにいても「うちは四ツ星です。」と聞きけばホテルかレストランを思い浮かべる人が多いであろう。実際チェックインの際ホテルのフロントに高々と四ツ星のプレートが掲げられていれば、行き届いたサービスを提供するホテルと第三機関が認定したと旅行者は理解し、安心して高額な宿泊料を支払えるであろう。また状況はレストランでも同様であり、美味しい料理をいただきながら大事な時間を過ごすに値する

場所かどうかの判断材料として我々は星数を参考にするのである。

ところが中国では学校長がこう発言するとしたらその意外さに多くの人は驚くのではないだろうか。新自由主義的な潮流下での競争的な環境によって学校改善を図ろうとするのが昨今の世界的な潮流であるため、学校評価の導入そのものに反対を唱える段階ではもはやないとしても、学校教育と評価制度が最も商業主義的な方式で結びついているように感じられるこの星級評価（原語：星級評価）は、学校評価制度を支持

する人でさえ行きすぎ感をぬぐえないであろう。上記の言葉は実際に筆者の訪問時のものであり¹、中国の一部の省で2000年代前半から星級評価は登場しすでに一定の時間が経過している。さまざまな施策が矢継ぎ早に出される中国において少なくとも10年以上実施され続けていることは、ある程度学校現場に定着してきていると推察される。少なくとも都市部の場合、より多くの子どもに質の高い教育を提供することが政策課題となっており、その一つの方策として学校評価が登場しているのであるから生徒・保護者の支持も一定程度はあると考えられる。したがって、極端にも見える中国の学校評価制度を表面的な印象だけで切り捨てるのではなく、その実施方法等の実態を詳細に分析していくことで、評価制度のもつ可能性や課題の本質を明らかにすることにつながると思われる。

そこで本稿では、中国国内でも最も先進的な取り組みをしていると評される江蘇省の学校評価制度について、導入の背景や、その特徴を中心にこの実態を明らかにしていくことにしたい。省政府や関連公的機関が率先して学校評価を実施している現在、その内実を検討することは、政府の意向、目指すべき学校像を明らかにすることにつながると思われる。そしてそこから浮かび上がる中国的な特徴を析出していくことにしたい。

1. 重点学校制度と星級学校制度

(1) 重点校の存在意義

社会主義と言えば「平等」という語を真っ先に連想するため、学校の格付けには強い違和感を覚えるであろう。ただし歴史が示すところによれば、それは中国で市場経済が本格化した1990年代からというわけではなく、少なくとも1950年代の建国当初から学校の格付けは存在していた（例えば1953年「關於有重点地办好一些中国和師範的意見」や1962年「關於有重点地办好一批全日制中小學的通知」²）。社会での平等を何よりも重んじていた中国で、当初から格差を肯定する根拠は何であったのだろうか。それは、1950年代の中国は、国民党との激しい国共内戦に勝利して建国したばかりであり、さらに朝鮮戦争にも参戦したことでまだ混乱状態にあり、限られた資源で新たな経済建設を行わなければならなかったからである。2010年代に入り世界第二の経済大国として世界的にも認知されてきたが、少なくとも1980年代までは中国を経済的に豊かであると認識する人は皆無であった。特に1950年代60年代は政治的な混乱も激しく、安定して経済建設に専念するという状況ではなかった。

そうしたなかで国家建設を直接担う人材の養成は急務であり、限られた財源で効率的に人材養成をする必要が生じた。経済資源や教育資源が限られていた時期にはまずは各分野のリーダーの育成が焦眉の急であった。したがって、どちらかというところ初等・中等教育よりも高等教育に財源配分の重点が置かれ、各段階の学校には上級学校への進学につながる学校を重点学校として経費の重点的な配分や優秀教員の配置を優先させた。それは小学校から大学まで一貫した政策であった。「義務教育法」が施行されたのは1986年のことであり、実は「機会均等」のスローガンが声高に叫ばれるのは1990年代に入ってからなのである。つまり、学校に格差を設け、一部の学校に経費を重点的に配分し、そこに優秀な学生を集めて上級の重点学校に進学させ、重点大学から各分野の指導者を輩出するという施策が社会一般に受け入れられていたのである。

こうした学校の格付けは、文化大革命の大混乱で一旦廃止されたが（そもそも学校教育全体が機能していなかった）、それが終結した後も重点学校を維持する「方案」（1978年「關於办好一批重点中小學試行方案」）や「決定」（1980年「關於分期分批办好重点中學的決定」）が提出されたのであった³。基本的にその考え方は1950年代と同じであり、限られた資源から効率的に指導者層を育成するために重点校を設けるというものであった。こうした点からも個人よりも国家を優先させ、国家のための人材養成という観点から教育が計画されていることがわかるのである。

(2) 重点校制度の特徴

こうして重点校とそれ以外の一般校とはさまざまな面で格差が存在したが、その重点校にもさらに格付けが存在することも留意する必要がある。それは、市（レベル）重点校、省（レベル）重点校と分かれ、施設・設備面、教育経費の潤沢さ、教員の質において明確な格差が存在していた。また高級中学（日本の高等学校普通科に相当）段階の場合、在籍する生徒も入学選抜の段階で先に優秀な生徒を入学させることのできる制度が整えられていた。つまり生徒の学力という面からみると、最も優秀な生徒が省重点校に、次の層が市重点校に、さらにその次が一般校に、最後に職業高級中学にと、「階層化」されていたのである。もちろん省重点校のなかの学校間の序列も生徒や親は認識しているため、少しでも威信の高い有名校に入学しようとして受験勉強に熱心に取り組むことになる。こうした環境では各「層」のなかの学校間では進学実績に多少上下の変化が起こりうるが、「層」間は固定化されており、したがって国家側からみると特に各省の重点校

から重点大学へとというルートを確保して高級人材養成を行ってきた。

重点校か否かは省や市政府が認定しており、明確な基準を設けそれに基づく各校の実績を反映して定期的に入れ替えるということではなかった。つまり行政主導でその都合による認定であったと言える。それでも、江蘇省では1990年頃は高級中学の重点校が100校程度であったが、2000年頃には200校までに増加していたので変化がないわけではなかった⁴。その格付けに大きな変化が起きたのは、2000年代に省レベルよりもさらに高い国家（レベル）示範学校が登場したことである。この示範という語は中国語でモデルという意味であり、したがって示範学校は他の学校を先導していけるような国家レベルのモデル校として承認されたことを意味する。江蘇省の場合、約200校のうちの約100校が国家示範学校となった。ただし、示範学校は名誉の称号であって財政面の優遇がないという特徴がある。

ところでこうした重点校制度は、1986年の「義務教育法」施行以降、少なくとも義務教育段階では法制上齟齬をきたすものとなった⁵。教育機会の均等の原則から学区内の学校への通学が奨励され、義務教育段階の学校の平準化を目指した。ただし実態としてはその制度は残り続け、(旧)重点校への入学希望者は後を絶たなかった。それは伝統といった力だけではなく、施設・設備や教員の質（教員異動の制度はない）に厳然たる差が存在することが明白だからであった。法制上重点学校制度が正式に廃止されたのが、2006年の新「義務教育法」によってであるが、この傾向は2010年代に入っても一向に収まらず、旧重点小学校・初級中学（日本の中学校に相当）に希望者が殺到する「択校現象」が問題視され、その是正に取り組み始めたところである⁶。

一方、義務教育段階にはない高級中学では、学校に格差が存在すること自体にはさほど批判が出なかったが、重点か非重点かといったいわば行政側による認定方式では、各学校の自主性や活力が生まれずとして、それに代わる格付けが求められていた。そして江蘇省は1990年代の後半から検討を始め、2003年に星級評価を導入するに至ったのであった⁷。この星級評価は、高級中学の教育の質の向上を目的として、現在のレベルからさらに全体を引き上げることを目的として設定された。それは具体的な評価項目を設定することにより、各校が明確な目標を持って自ら努力することを目指したのであった。また、それは政府側からみれば、政府の目指す方向へ全体を誘導させる機能をもっていた⁸。

2. 学校評価の内容と特徴

(1) 評価指標1：「施設・設備」

この星級評価の最大の特徴は、「はじめに」で言及したように、省内の高級中学がすべて一つ星から五つ星でランク付けされることである。いわばミシュランのガイドブックに掲載されるレストランの学校版とも言え、受験生やその保護者に最もわかりやすい指標となる。江蘇省教育庁によるこの5段階評価の各段階の意味は、一つ星が「初級段階」に位置づけられ、実績のない新設間もない学校をイメージしている。二つ星は「基礎段階」に位置づけられ、(旧)市レベルの重点校からの移行を基本としている。三つ星は「中堅」に位置づけられ、(旧)省レベル重点校からの移行を基本としている。四つ星は「模範校」と位置づけられ、現在の国家級示範校が位置づけられる。最高位に位置する五つ星は「国際水準」と位置づけられ、各高級中学が最終的に目指す目標となり、現段階では当てはまる学校は存在しない⁹。

学校評価は、一般に定量評価が難しいと言われる¹⁰が、この星級評価は可能な限り定量的に行おうとしたところに特徴がある。評価項目は具体的であり、比較的容易に判断が可能とされている。以下で、各項目についての内容に言及していくが、まずは評価項目の全体像を示しておく必要があるだろう。一つ星（以下ではよりわかりやすく1級とする）から五つ星（5級）まで、それぞれに25の評価項目が文章で具体的に用意され、「1. 施設・設備」、「2. 教員」、「3. 管理」、「4. 素質教育」、「5. 成果」の5指標（領域）に束ねられている。各領域の項目数は5つ程度で、星級ごとに多少増減がある。各学校はこれら25項目で言及されている基準をすべて満たさなければならないことになる。以下では、指標ごとにそれぞれの内容と特徴を論じていくことにする。なお、紙幅の関係で、1級と2級は割愛し、3級以上の項目を掲載することにする。また、各項目は語句で簡潔にまとめられているが、実際の項目は文章でより具体的に説明されていることを予め理っておきたい。

まず表1が「施設・設備」の評価項目である。3級がこの「施設・設備」に8項目を要しているのに対し、4級と5級は4項目である。ここから、施設・設備のいわば条件整備を3級までにほぼ完成させることを求めていることがわかる。その内容は、校舎面積や運動場の広さ等、具体的な数字として指示されており、学校側はそうした条件を整えていくことになる。

しかし、ここで素朴な疑問が出てくるであろう。そもそも「1. 施設・設備」は、評価を行う行政側が保

表1 「施設・設備」指標

指標	3級	4級	5級
1 施設・設備	1 規模 30クラス以上/ 1クラス54人以下	1 規模 高中は独立 36クラス以上/1ク ラス50人以下	1 規模 1クラス46人以下
	2 校舎面積 1人当たりの敷地 面積が23㎡以上 1人当たりの校舎 面積は13㎡以上	2 校舎面積 新しい学校は 100㎡以上	2 校舎面積 広くてゆったりしている
	3 視聴覚室 コンピュータが 10人に1台	—	
	4 実験室 十分な設備 (2人1組が可能となる)	—	
	5 図書館 蔵書数・雑誌数 が二級館レベル 毎年1人当たり 1冊以上購入 閲覧室は12人に1脚	—	
	6 宿舎・食堂 1人当たりの建築 面積は4.5㎡以上 食堂の椅子は 生徒総数の70%以上	—	
	7 運動場・保健室 300㎡以上のトラック バスケットボール コート4面以上 十分な医療機器と薬品	—	
	8 校庭 緑化が十分	4 校庭 調和がとれている	4 校庭 調和がとれ、特色を 出している
	—	3 施設・設備 1人当たりの固定 資産は3000元以上	3 施設・設備 生徒1人当たりの固定 資産が4000元以上

出典) 江蘇省教育評価院(編)『江蘇省普通高中星級評估手冊』江蘇教育出版社, 2007年, 16-24頁をもとに筆者作成。

証することである。少なくとも公立学校であればどの学校も当然こうした基準を満たしているはずであって、評価の対象にはならないであろう。ところが図書館の蔵書数や運動場の広さ等が評価の対象になるとするのは、こうした点でも学校側に自助努力を求めていることを意味し、きわめて中国的であると言える。

では、こうした施設・設備の改善のための経費をどこから調達するのだろうか。ここで関係するのは、「規模」の項目である。例えば、3級では1クラス54人以下であること、同様に4級では50人以下、5級では45人以下と異なっていることが注目される。学級の規模を昇級の一つの基準にすることは日本的に考えれば奇妙である。そもそも関連法規によって学級規模は決まっているのではないかと考えられるからである。確かに江蘇省の関連法規に当たると高級中学の学級規模は54人以下と決められている¹¹⁾。これは正規の人数、言い換えれば高校入試(原語「中考」)に合格して入学してくる定員を意味しているが、現在中国の高級中学では、それ以外に、高校入試で若干合格ラインに届かなかった生徒を、高額の入学金(寄付金)もしくは高額の学費を徴収して入学させることができる制度が公的に認められている。それがどの程度まで認められているのかといえば、地域や時期によって異なっているが、入試での最低合格ラインから30点以内や、正規の定員の20%の人数までこの「択校生」として入学させて良いとしている。こうすることによって、学校が独自の財源で学校改善に役立てるための資金を確保することが

できるのである¹²⁾。

(2) 評価指標2:「教員」

次の指標は教員である。教員の資質は学校改善のなかでも最も重要であると言われるが、表2からは5つの特徴を指摘できる。

第一の点は、学歴要件を評価項目に入れていることである。現在高級中学の教員の学歴は大学の学部(「本科」)卒以上となっている。そうした条件を満たした者が教員採用試験を受けて教員に採用されることになるが、中国の場合、そうした要件を満たさなくとも、教壇に立っている教員も存在する。あるいは免許で定められた教科でない教科を教えているケースもみられるのである。それは長い政治的な混乱から、安定した教員養成がままならなかったことや知識人と認識される教員を否定的に見ていたこと、あるいは1980年代以降も給与が低く抑えられていたために人気のある職業とならなかったことが原因であった。現在では教員の人気はある程度高くなっているが、大学学部卒という条件が評価項目として消えるのにはまだ時間がかかるであろう。その一方で大学院修了の教員も一定数求めていることから、学歴の高度化も進んでいることもわかる。

第二に、同じ項目でもう一つ重要な点は、「中・高級技術職務」の割合が各級で設定されていることである。中国の教員には国家資格としての職階が設けられており、高級中学の場合、2級、1級、高級に分かれ、

中国における学校評価制度の特質
— 重点学校制度から星級学校制度へ —

表2 「教員」指標

指標	3級	4級	5級
2 教員	9 校長 長期間教育に従事 学校管理に関して研究している	5 校長 省レベル以上の重大な 課題の研究をしている	5 校長 修士or博士の学位、または 特級教員の称号 研究成果や出版物をもつ
	10 教員資格 学歴要件を満たしている教員が 85%以上 中・高級技術職務50%以上	7 教員資格 学歴に達している人が 100% 一定数は修士の学歴 中・高級技術職務60%以上	7 教員資格 修士学位取得者20%以上 その他は学部卒以上 中・高級技術職務70%以上 一定数は博士と外国人教師
	11 教員の質 大多数の科目の県(市)レベル のリーダー 一部は県(市)レベルの中堅 一部の科目の教員が強い 半数以上の教員が1科目以上の 専修課程を教えている 60%以上の教員が全ての学年 を教えた経験がある	8 教員の質 大多数の教員は1科目以上 の専修課程を教えている 70%以上の教員が全ての 学年を教えた経験がある 外国語が運用できる教員が 一定数いてバイリンガル教育 ができる 一定数の教員は省レベル のコンテストで入賞している 10人以上の省(市)レベル 名教員、名校長、特級教員 がいる 教員の中には県や市のな かで規範的な科を開設して いる者がいる	8 教員の質 大多数の教員は1科目以上 の専修課程を教えている 半数以上の教員は市レベル の講座を開設している 一部分の教員は省レベルの コンテストで入賞している 相当数の教員が外国語に堪能 でバイリンガル教育がで きる 10名前後の特級教員
	12 研修 教員給与総額の6%以上を使用	9 研修 海外での研修もある 教員給与総額の8%以上を 使用	9 研修 特色がある 教員給与総額の10%以上 を使用
	6 管理部門 団結している	6 管理部門 団結している	6 管理部門 団結している

出典) 江蘇省教育評価院(編)『江蘇省普通高中星級評估手冊』江蘇教育出版社, 2007年,
16-24頁をもとに筆者作成。

それに対応した俸給表が存在する¹³。こうした職階は、日本の場合の大学教授職の教授、准教授、助教のような区分であると考えるとわかりやすい。こうした職階を設けることで、教員の士気を維持させ、職能成長をはかっていこうとする政府の意図がある。また、職階を上げるには、厳格な審査があり、一定の年数を経れば皆が昇進していくというものではない。その意味で教員になった後でも一定の競争が職場にはあると言える。なお、職階ではないが、高級の上には特級という名誉称号的なものもあり、「特級教員」が学校に何人いるかという情報はその学校のステータスを高める宣伝材料にもなっている。さらに近年では「教授教師」という称号も登場し、教員の階層化にさらに拍車をかけているようである¹⁴。したがってこの星級評価との関係で言えば、より質の高い教師を採用することも星級を上昇させる重要なポイントとなっていることがわかる。

第三の特徴として指摘できることは、「教員の質」の項目で、何らかのコンテストで入賞している教員を評価していることである。これは教えることのみならず、教室や校内で直面する諸問題に対して常に研究する態度で望んでいて欲しいという、いわば「研究する教師像」をモデルとしていることを示している。そうした研究態度を醸成するためにさまざまなコンテストが市レベルや省レベルで用意されている。こうしたコンテストで入賞することは、教員個人にとっても、日常的な賞与の増額と関係し、さらに職階を上げるための審査にも重要な点となる。

第四は、「1科目以上の選修課程を教えている」という項目があることである。近年は、学校の自主性を尊

重し、学校の独自性を出せる「校内課程」¹⁵が登場してきている。そこで例えば数学を担当する教師であっても、それ以外に数学関連の「選択」科目を提供することが求められているのである。そうすることで教育課程の多様化や生徒のニーズを満たす教育課程ということを重視していることになる。

第五の点として、グローバル化を反映して、4級、5級では教員に外国語に堪能であること、二言語教育を実践できるようになることも求めている。

(3) 評価指標3:「管理」

次は学校の管理面の項目である。各級とも5、6項目で構成されるが、他の指標と異なり、数値基準が登場していないという特徴がある。全体の方向としては、各学校が明確な目標を持ち、それに基づいて学校を効率的に運営していることが求められているのである。

ここで一つ注目すべき点としては、4級と5級で学校運営を地域社会に開いていくことを求めていることである。これは日本の改革の方向と同様であり興味深い。また、「職場環境」の項目があり、中国で十分でないと言われてきた福利厚生面の充実も求めていることも興味深い傾向である。

(4) 評価指標4:「素質教育」

近年の教育改革でキーワードの一つあげるとすれば、間違いなく「素質教育」であろう¹⁶。この「素質」は中国語のままであるが、その反対語が「応試」であり、こちらから考えると理解しやすいかも知れない。この「応試」教育とは字の如く試験に対応した教育という意味である。ここから関連するキーワードは、「受動

表3 「管理」指標

指標	3級	4級	5級
3 管理	13 運営目標 明確	10 運営目標 先進的で模範となっている	10 運営目標 しっかりしている
	14 事務 職責が明確	11 事務 職責が明確	11 事務 完全な規章制度
	15 人事 人事が積極的で良好		
	16 校風 優良な校風、教風、学風	13 校風 優良な校風、教風、学風	13 校風 特色ある校風、教風、学風
	17 管理運営 教育資源の利用率が高い、コンピュータの利用	12 管理運営 管理モデルが模範的である	12 管理運営 コンピュータの利用
		14 地域の参加 運営が開かれていて民主的	14 地域の参加 運営が開かれていて民主的
		15 施設開放 学校の施設を開放	
		15 職場環境 福利厚生がしっかりしている	

出典) 江蘇省教育評価院(編)『江蘇省普通高中星級評估手冊』江蘇教育出版社, 2007年, 16-24頁をもとに筆者作成。

的」,「暗記」となり,「素質」とはその反対の「主体的」,「思考」,また「個性」となり, PISA 型,あるいは21世紀型学力とも結びつくものである。したがって「素質」よりも「素養」教育の方が日本語として適切なかもしれないが,本論ではそのまま「素質」を使用することにする。そしてこの「素質教育」は現在の中国政府の目指すべき学力観を示す語になっているのである。

これらの項目のなかで注目すべき点は2点ある。「教育課程」の項目では,生徒の個性を尊重する「素質教育」を反映して,生徒のニーズに対応した新たなかつ多様な授業科目を提供することを求めていることである。もちろんそのための努力も5級では求めている。また関連して「研究」項目でも「素質教育」を実践するための研究を奨励していることがわかる。さらに「素質教育」を継続して向上させるための評価,すなわち授業評価の実施や開発にも力を入れていることがわかる。

もう一つ重要なことは,グローバル化を反映して,

海外の学校との交流を求めていることである。「素質教育」には世界的な視野に立つことも求められ,5級においては一部の科目に二言語教育での実践も求められていることがわかる。

(5) 評価指標5:「成果」

最後の評価指標は「成果」である。これは「実績」の項目を見れば明らかなおと,生徒の大学入試での成績結果を指している。これは言うまでもなく,生徒や親が最も関心を抱く点であり,ここで具体的に基準が設定されていることに鑑みると,「素質教育」を推進しても,結局は入試結果でそれが評価されることになるのかという疑問とも突き当たる。いずれにせよ,これらの基準は非常にハードルが高いと言わなければならない。

3級で言及されている「総合テスト」とは一般に「会考」と言われ,卒業試験のことである。中国の高級中学で卒業証書を得るには,履修するほぼ全科目(例えば北京市では9科目)の必修課程の領域を習得してい

表4 「素質教育」指標

指標	3級	4級	5級
4 素質教育	18 德育 学校と家庭と社会が結合している	16 德育 特色がある	16 德育 生徒主体の活動がある
	19 教育課程 生徒の評価が高い	17 教育課程 生徒の選択幅が広い 生徒の評価が高い 兄弟校の模範となる	17 教育課程 課程開発に積極的 自由な選択科目がある 校内課程の教材開発も行う 生徒は毎日自習時間が3時間以上
	20 教育方法 先進的な教育方法を使っている	18 教育方法 民主的で平等な教育方法	18 教育方法 毎学期4回以上の課外学術授業を聞く 一部の科目はバイリンガル教育を実施
	21 評価制度 評価活動を実施、研究している	19 評価制度 評価活動を体系的に行っている	19 評価制度 さまざまな評価制度の導入と活用
	22 研究 毎年半数以上の教員が研究成果を発表 30%以上の教員が市レベル以上の雑誌に発表 市レベル以上の課題を実施	20 研究 省レベルの課題を研究している教員がいる 省レベルの刊行物に論文を発表している 大多数の教員が毎年研究成果を発表 多くの実験項目では段階別の成果を出している	20 研究 毎年省レベルの課題を請け負う 一般的課題は3本以上請け負う 大多数の教員は毎年論文を1本以上発表
		21 交流 国内外の学校と交流をする	21 交流 海外の学校と共同で活動したり交流したりする

出典) 江蘇省教育評価院(編)『江蘇省普通高中星級評估手冊』江蘇教育出版社, 2007年, 16-24頁をもとに筆者作成。

表5 「成果」指標

指標	3級	4級	5級
5 成果	23 成績 総合テストや大学入試の成績が平均より高い	22 成績 直近3年間毎年約80%の卒業生が本科に入学 一部は一流の大学に入る 比較的多くの生徒は市レベル以上のコンテストで入賞	22 成績 大多数の生徒は一流の大学に合格 一部は国内外のコンテストで入賞
	24 将来 学校の特色を出す	23 将来 学校の特色を出す	23 将来 国内外で知名度を得る
	25 名声 学校に対する評価が良い	25 名声 学校に対する評価が高い	
		24 模範 地域のモデル校となる	24 模範 モデル校となる
			25 支援 兄弟校の支援を行う

出典) 江蘇省教育評価院(編)『江蘇省普通高中星級評估手冊』江蘇教育出版社, 2007年, 16-24頁をもとに筆者作成。

るかを確する省統一のテストに合格しなければならない。それに合格しなければ卒業証書が取得できず、大学入試にも参加できないことになる。またその「総合テスト」では合格・不合格だけではなく、点数も出てくるので、3級では学校としての平均点が全体の平均点よりも高いことを求めているのである。それは大学入試の点数でも同様である。

一方4級になると、その条件はさらに高くなり、80%が四年制の本科に合格しなければならない。そして5級になると大多数が一流大学に合格していないといけないという極めて高い基準である。この場合の「一流大学」とは一般に211大学を指している¹⁷。中国では、高等教育機関が明確にランク付けされており、上位に211大学と言われる約100校の大学に位置づいており、これが「一流大学」となる。その下には省立大学・学院があり、さらにその下に市立大学・学院および四年制の私立大学が位置づき、最後に2-3年制の専科学校となる。

この序列は大学入試の際の選抜のプロセスとも一致しており、省ごとに統一した試験を受けた結果の点数によって、211大学から合格者を決めていくことになる。したがってこのプロセスから明らかになることは、省立大学・学院に入学した学生は、211に合格しなかった学生であり、専科学校に入学した学生は、四年制大学には合格できなかった学生ということになる。こ

うした明確なランクのなかで、「80%が四年制大学に」とか「大多数が一流大学に」という具体的な基準はハードルが高く、従来からの受験競争の状況が結局は変化していないと評することも可能であろう。

もう一点重要なことは、4級、5級ではモデル校となることが求められていることである。星級評価の目的は、省内の全ての高級中学に具体的な目標を持たせることにより、結果として全体が向上していくことである。そのため全てが5級になることが究極の目標となる。そのためにはすでに条件を満たしている学校は他校の模範となり、先導していくことが求められている。実際近年では複数の高級中学を「教育集团」としてグループ化し、星級の高い高級中学が低い高級中学を援助していくことが流行している。4級や5級では「模範」項目や「支援」項目においてそうした活動も求めているのである。

3. 星級評価の手続きと意義

(1) 学校評価の手続き

以上が評価項目の内容であるが、それでは、星級評価の手続きについて、以下の図1をもとに説明していくことにする¹⁸。

まず星級評価を受けるためには、学校側が自ら自己評価表(「江蘇省普通高中星級評估自評表」)を作成し

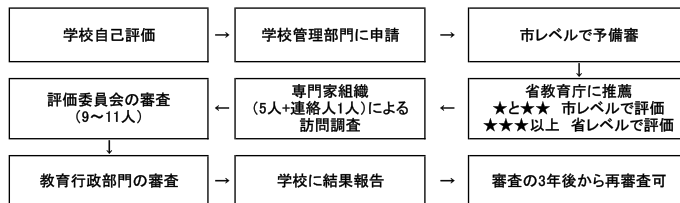


図1 星級評価の手続きのながれ

出典) 江蘇省教育評価院(編)『江蘇省普通高中星級評估手冊』江蘇教育出版社, 2007年, 6-7頁, をもとに筆者作成。

なければならない。これは46頁にも渡る膨大なものであり、1年もしくは2年前から準備を進めていかなければならない。また求められる項目の証拠資料を添付しなければならない。

それが終わると学校管理部門にその自己評価表を提出することになる。南京市の場合は区政府である。そして各区を含む市レベルで予備審査を行う。その審査は評価項目に沿った内容を点検し、申請する級の条件を基本的に満たしていれば、その次の段階として省教育厅に推薦することになる。ただし、一つ星と二つ星は市レベルで本調査に入ることになり、三つ星以上が省レベルと区別されている。その本調査は、5名と連絡人1名を含む専門家で組織され、実際に学校を訪問することになる。そこでは自己点検評価表に記入されている内容を確認するとともに不明確な点を校長や教員に直接聞き取るようになる。評価は総合得点方式ではなく、各項目をすべて満たしているかどうかを確認していく。

この調査の結果は評価委員会に持ちかえり、そこで検討することになる。このときの評価委員は9人から11人で構成されることになる。そしてこの評価結果を最終的に教育行政部門が審査をし、最終判断することになる。その結果は学校に報告され、不合格であれば審査の3年後から再申請が可能となる。また特定の級に合格した学校も5年ごとに審査を受けなければならないので5年後にはまた同じ級の審査を受けるか、あるいはより高い級で審査を受けなければならないことになる。

(2) 努力しつづける学校像

こうした星級評価により、各高級中学が昇格するための改善の余地について具体的な目標を提示できるようになった。この格付けの目的は優秀校を選抜することではなく、高級中学段階であっても最終的には「均衡発展」を目指すことにある。政府の当初の計画では目標として2005年時点で三つ星以上の学校を全体の50%、生徒募集人数でみれば70%を目指し、2010年には三つ星以上の学校を全体の70%、生徒募集人数でみれば90%を目指すことであった¹⁹⁾。

現在、各級の校数に関する統一的な情報はない。ただし、ウェブ上や年鑑から把握できる情報をつなげると表6のようになる。この表で「？」は不明であることを示している。明らかなのは、現在でも五つ星校が1校も存在しないことであり、全ての学校が学校改善のための努力を求められていることである。先に見た評価項目で5級に該当する箇所をみれば、どれもそう簡単には達成できないものばかりであり、五つ星校の

表6 江蘇省及び南京市の星級別学校数

星級	全省(737校) 2008	南京市(60校) 2010
★	初級	?
★★	基礎	?
★★★	中堅	253
★★★★	模範	176
★★★★★	国際水準	0

出典) 江蘇教育評估院「項目簡介」< http://jypgy.ccit.js.cn/pgxm_xmjj.asp?id=3> 及び江蘇省教育厅(編)『江蘇教育年鑑2011』江蘇教育出版社, 2012年, より筆者作成。

誕生にはまだ時間がかかると考えられる。一方、三つ星以上を70%という目標は2008年当時のもので類推する限りすでに達成しているものとみられる。2014年時点でのインタビューであるが、ある高級中学の校長は「三つ星から四つ星に100校くらい上昇した。」と発言しており、改善の努力を惜しまなければ上昇は十分可能であることがわかる。

こうした5つの領域、25項目のなかで何が特にポイントなのであろうか。もちろんどの項目もそれぞれ重要であるが、先の校長のインタビューでは進学結果が最も重要であるということであった。高級中学での教育の「成果」が結局211大学への入学率によって評価されるということが、現在の状況を示しているということである。

一方、星級を上昇させることによって高級中学側には何のメリットがあるのであろうか。政府からの優先的な経費配分に加えて、最も重要な点は生徒募集に有利になるという点である²⁰⁾。大学と同様に、生徒の選抜は四つ星校から順番に選抜を行っていくため、試験の結果にもとづいて四つ星校、三つ星校、という順番で入学許可をしていくことになる。つまり、優秀な生徒は星級の高い高級中学に集まることになる。できるだけ優秀な生徒を確保することは、学校の進学実績を重ねるにも、こうした星級評価を上昇させるにも最も重要なことであろう。この点で義務教育段階にない高級中学は目に見える厳しい競争に晒されていると言えよう。

また、既述のとおり、この星級評価は固定的なものではない。どんなに高い評価を受けたとしてもその有効期限は5年間であり、5年後には同じ級で、もしくはそれよりも上の級で評価を受けなければならない。つまり5年間で何が変わったのか、どう努力したのかを

学校管理者側に定期的に示さねばならないのである。しかも、これまでに存在した重点校制度のなかでの評価は、重点的に経費や教員配置を優先している状況下でそれに見合った重点校としての役割を果たしているかという評価であったため、それ以外の一般校には無関係であったが、この星級評価の対象は全ての高級中学、最近増加してきている民営（私立）の高級中学も対象としているという点で全面的な評価なのである。

興味深いことに、江蘇省には進学実績等で名を馳せている、いわゆる「名門校」は何校も存在しているが、まだ五つ星学校は存在しない。インタビューを受けた校長によれば国際水準にならないと五つ星にならないという。先の評価で言えば、海外の学校との実質的な交流や二言語教育、外国人教員の雇用等を行っていかねばならない。それらの点で、こうした名門校にもさらなる高いハードルを課して努力させることを目的としているのである。

おわりに

以上本論で、江蘇省で実施されている学校評価の現状を検討しながら、中国的な特徴を考察してきた。日本の現状を考えた場合、その実態は極めて大胆で極端なようにみえるが、10年余の実績によりすでに学校には根付いているようである。その特徴をまとめると以下の3点に整理できよう。

第一に、すでに固定された格付けが存在していた中国で、変動しうる評価を導入したことにより、全ての高級中学を巻き込んだ学校改革の起爆剤として機能していると評することができよう。実際に昇級した高級中学も少なくないようで、こうした競争的な環境により制度全体を活性化させ、向上させようとする政府の意図がみえてくる。この点で忘れてはならないのは、レベルの高い学校が低い学校を引っ張っていく「教育集团」という仕組みをつくり、それも学校評価の一部に組み込むことによって特定の学校だけを引き上げ、残りを切り捨てていくことにはなっていないことも注目できる。

第二に、評価指標や評価項目は具体的であり、努力の方向性がみやすくなっている。各指標のなかに具体的に目標となる数字を示し、それによって高級中学全体を省政府がどのような方向に導こうとしているのかも明確になっている。この点で評価結果が仮に不合格であったとしても改善の余地がどこにあるのかが明確になり、次回の評価に向かっての方針が立てやすいという長所が指摘できる。

第三に、高級中学にとってこうした星のランクは実

質的な益があることである。高級中学入試は統一試験であるが、四つ星校は第一回選抜校になることである。これにより最も成績の良い生徒を選抜できることになる。入学時点で優秀な生徒を確保できることは、卒業時に一流大学への進学が大いに期待でき、星級評価も上昇が期待できる。高級中学側にとっては高い評価を受けることのモチベーションはここにあると言える。

最後に、先の校長が述べた「江蘇省にはまだ五つ星学校はありません。国際対応にしないと五つ星にならないのです。」ということから、こうした星級評価によって高級中学段階でもグローバル化に対応させようとしていることがわかる。日本にとって、こうした改革の動向は多少なりとも参考になるかも知れない。

【注】

- 1 2014年9月16日に訪問し、校長等関係者にインタビューを行った。
- 2 朱麗「個人利益抑或公共利益：教育改革的兩難困境—從我国重点学校制度的沿革說起」『基礎教育』第6卷第1期，2009年，27頁。
- 3 吳頰民「從“重点中学”到“優質教育品牌学校”」『華東師範大學學報（教育科學版）』第26卷第3期，93—94頁。
- 4 2014年9月16日に校長とのインタビューより。
- 5 胡金木「公平与效率的二重奏—以改革開放以來“重点学校”政策的變遷為綫索」『中國教育學刊』2009年2月，10頁。
- 6 王香麗「基礎教育階段重点学校制度對我国教育公平的影響」『教育評論』2010年第6期，3—6頁。
- 7 袁益民・孔宝宝「星級評估為江蘇高中教育洗牌」『中小學管理』2004年6月，16—18頁。
- 8 この評価方法のモデルは、すでに国際的に名の知れたCIPPモデルである。これにより評価情報を意思決定に用いることができるようになった。なお、これにより各校にとって最も重要な学校評価活動がこの星級評価になったわけであるが、これはいわば省レベルの評価活動ということになる。それ以外にも直接的な学校の管理者になっている南京市の各区政府や南京市教育局も学校評価を実施していることを確認しておきたい。ある高級中学の校長によれば評価は毎年行なわれ、区教育局の評価は、1000点満点になっていること、市教育局の評価は、去年よりどこが良くなったかといういわば発展性の評価である。
- 9 江蘇省教育評估院（編）『江蘇省普通高中星級評估

- 手冊』江蘇教育出版社，2007年，3頁。
- ¹⁰ 劉永和「地区性学校評估的現状及其对策」『教育学研究』8，2007年，117頁。
- ¹¹ 「江蘇省中小学管理規範」2006年。
- ¹² 2014年9月16日の訪問調査より。
- ¹³ 「中学教師職務試行条例」1995年。
- ¹⁴ 陸安「中小学教师職称改革須謹慎推進」『中国教育學刊』2012年2月，82頁。
- ¹⁵ 教育部「普通高中課程方案（実験）」2003年。
- ¹⁶ 国家教育行政学院（編）『基礎教育新視點』教育科學出版社，2003年。
- ¹⁷ 『新編高校招生錄取及填报志愿指南』西藏人民出版社，2013年，126-147頁。
- ¹⁸ 江蘇省教育評估院（編）『江蘇省普通高中星級評估手冊』江蘇教育出版社，2007年6-7頁。
- ¹⁹ 袁益民・孔莹莹「星級評估 為江蘇高中教育洗牌」『中小学管理』6，2004年，17頁。
- ²⁰ 2014年9月16日の訪問調査より。

【付記】

本稿は、日本學術振興会「平成24～26年度科学研究費補助金（基盤研究（B）・課題番号JP24330230）（アジアにおける学校改善と教師教育改革に関する国際比較研究・研究代表者：小川佳万）の交付を受けて実施した研究成果の一部である。